

目的 視覚形態に対する人間の相互反応は主観的で測定は困難であるが、個々の反応は多少異っても人間は生れながらの知覚と文化的環境が類似していることから一般化は可能といわれる。そこで衣服に対する美的感覚に関わると思われる衣服の形態について視覚的反応の測定を試みることによって嗜好傾向並びに反応に及ぼす因子の存在を明らかにした。

方法 衣服形態に対する視覚的反応は部分形態よりも全体形態に反応する場合が多いと思われるので、最近の服飾雑誌の中から衣服形態11種類を選び、モデルに着装した全体の衣服形態を *line drawing* で示して試料とした。始めに一对比較法を用いてどちらを好むか、およびどちらを着装したいかについて質問し、嗜好傾向を求めた。次に *line drawing* にふさわしい形容詞対20語を抽出し、SD法を用いて5段階評価を行い、主成分分析を行った。なお、被験者は衣服に関心のある本学被服専攻1・2年生80名とした。

結果 一对比較法による11種類の衣服形態について被験者の好みを分散分析した結果、主効果である衣服形態の種類に有意差が認められ、明らかに好かれる形態と嫌われる形態のあることがわかった。また、好きな衣服形態は着装したい形態とは必ずしも一致しないことも推察された。次にSD法による形容詞対20語について主成分分析を行った結果、衣服形態による視覚反応の総合特性値として第一主成分に「落ちついた」「すっきりした」で代表される因子が因子負荷量44.7%で抽出され、第二主成分に「女らしい」「ロマンティック」で代表される女性因子が全体の衣服形態に対するイメージの28.9%を占めた。第三、四主成分も抽出されたが、いずれも因子負荷量は小さい値を示した。